

道元禅師の和歌

平成29年2月第3週放送

大本山永平寺を開かれた道元禅師は、その教えを示された『正法眼蔵』などの著作の他に、多くの和歌を残されています。後世にそれをまとめた『道元禅師和歌集』が編纂され、さらに江戸時代には、面山瑞芳禅師が編纂された『傘松道詠』が世に出て、広く知られるようになりました。

道元禅師は折にふれて和歌を詠まれ、その内容はさまざまです。

その中で、僧侶としての志を詠ったものがいくつかあります。

「おろかなる 吾れは 仏に ならずとも 衆生を渡す 僧の身ならん」

愚かな私は成仏できなくとも、多くの人々が救われるならば、僧侶として本望である……といった意味。

「草庵に 起きても寝ても 祈ること 我より先に 人を渡さん」

ともあり、こちらは草庵において起きても寝ても祈ることは、私が成仏するよりも先に人々を救うことである……ということでしょうか。

それぞれの歌では、「衆生を渡す」「人を渡さん」と、「渡す」という言葉が出てきます。

道元禅師は、修行者は「自未得度先度他（自ら未だ度らざる先に他を度す）」という心をおこすことが大切であるとおっしゃっています。

我々の生きる、苦しみの世界である“こちらの岸”から、おさとりの世界である“彼岸”に人々を渡すこと。さらに人々の成仏を願い、他の人を先に救うことを誓い、修行を続けるのです。

そして、「自未得度先度他」の心をおこしたちからによって、自らが仏になろうと思っはいけないとし、自分が仏になるほどに徳を積んだとしても、なおそれを他の人々のために廻らし向けよと示されています。

自分よりも他を先に渡す。自分が仏になれるのに、それをあえてせずに他を救う。この厳しくも深い思いが、二つの歌には貫かれています。

「おろかなる 吾れは 仏に ならずとも 衆生を渡す 僧の身ならん」

「草庵に 起きても寝ても 祈ること 我より先に 人を渡さん」